

# パーリ聖典中の śrad-√dhā の意味について

—Norman 説に注目して—

古川 洋平

## 1. はじめに

本論はパーリ聖典中のサンスクリット語 śrad-√dhā 由来の語（以下「ś」と表記）の意味の議論のうち<sup>1)</sup>、特に K. R. Norman 氏（以下「N」と表記）の主張の一部に焦点を当てている。N は、Dhp 97 をはじめとする聖典中のいくつかの ś が「欲」(desire) の意味や方向性で用いられている可能性を指摘する。彼の主張は、相当漢訳経が ś にあたる語を「欲」と訳し（後述）、紀元後数世紀のインド語文献において ś が abhilāṣa 等「欲」の方向性でも理解されている事実の中で<sup>2)</sup>、ある程度受け入れられてきたと言える。しかしながら、ś を「欲」と訳す事例があることと、パーリ聖典中で通常「信」と訳される ś がどのような形で「欲」と解されるのかという問題は別に考察されねばならない。近年ではヴェーダ文献以来 ś の動詞語形が一貫して「信を置く」「信ずる」「信頼する」の意にあり「欲」の意味が古くは遡らないことが指摘されており（後藤 2007, 578, 569）、中間に位置するパーリ聖典中の ś と「欲」に関しては未だ明らかでない部分が多い。

そこで本論では、Dhp 97 に対する N の理解を確認した上で（⇒2）、外教者の ś を検討することでその妥当性を考察する（⇒3）。次いで、同じ視点で氏が指摘している他の ś について若干検討を加え（⇒4）、まとめとする。

## 2. Dhp 97 に対する Norman 氏の理解とその問題点

assaddho akataññū ca sandhicchedo ca yo naro

hatāvakāso vantāso sa ve uttamaporiso. (Dhp 97)

N の理解: The man is without desire (without faith), ... is the best person (is one of extreme audacity).  
(Norman 1997, 14)<sup>3)</sup>

上掲例について N は、assaddha 等が形容している uttama-porisa を文脈上「最上の人間」(<puruṣa) と「最も厚かましい者」(<pauruṣa) の両義に解釈できる点を指

摘し、前者を悪い意味である「欲」(desire)としてのśがない者と解する(後者は良い意味での「信」(faith)がない者. Norman 1991, 189–192). しかし、両義に解釈できるとしても、前者を註釈説明にあるように「已に自ら理解しているので他者の言葉を信じるに及ばない者」(趣意)と理解すればよく(Dhp-a II, pp. 186f. Cf. S V, pp. 220f.)<sup>4)</sup>, śを「欲」と考える必要は無い(Cf. Ja-a III, p. 78)<sup>5)</sup>. Nは他の実例として「最上の人間」(uttama-nara)の形容部分 Sn 853d: na saddho na virajjati を提示するが(Norman 1991, 191f.; 2001, 355)<sup>6)</sup>, これも Dhp 97の場合と同様の註釈説明がなされている(Nidd I, pp. 235–237, Pj II, p. 549).

上掲例の漢訳パラレルはśにあたる語に「欲」を用いているもの(⇒注3, 6), 上座部大寺派の資料の枠組みで見ると、上にとり上げたśをNの述べる通りに「欲」と解すべきかについては疑問が残る. Nの理解は、śを良い/悪い意味で区別し、特に後者の否定的に使用されるśに「欲」の意味を設定するという視点に基づいている. 以下、この視点の妥当性について考察を加える.

### 3. Norman 氏の視点の考察

パーリ聖典において、śは五根・五力等の修行徳目の一つとしてしばしば言及され(S V, pp. 196–197 etc.), その他如来や諸善法に対するśも散見される(D I, p. 63, S II, p. 206, etc.). これらのśは解脱などに結びつくものとして具えるべきものとされることはあれ、否定的に扱われる面は認められない. そこでNの視点の考察にあたり、以下聖典内で否定的・批判的に取り上げられることが多い外教者のśの扱いに注目したい.

M 95で釈尊は、バラモン達が伝承するマントラが真実であることについて彼等の師をどこまで遡っても確かめられない点を指摘し、師に対するś(信)を根無し(amūlikā saddhā)であると批判する. このśは一見否定的に扱われているようにも見えるが、後に比丘(釈尊)に対するśを具えた弟子が真実を覚るまでの道程が示されている点から明らかなように、釈尊が批判しているのはあくまでśの対象である師が真実を見、知っていない点であり、ś自体が否定的に扱われているわけではない(M II, pp. 169–173).

外教者と釈尊を対比するケースは他にも見られる. M 34ではこの世・あの世等に通じていない沙門・バラモン達の言葉をśされるべきものと考え場合に不利益や苦に繋がるとされ、A 6.30では邪見を有し邪な実践をする沙門・バラモンに対するśを含めた獲得物が涅槃に結びつかないものとされている. 上の2例で

は、釈尊や仏弟子に関わる  $\acute{s}$  の場合は各々の逆であると説かれている (M I, pp. 225–227, A III, pp. 326f.). また, S 42.12.27–30 では苦行者が  $\acute{s}$  を抱いて出家している. 本例では同じ言い回しで善き事柄に到達しない者, 善き事柄に到達するものの特  
殊な知見を目の当たりにしない者, 両方とも達成する者の3パターンが説かれる  
(S IV, pp. 337f.).

上に提示した諸例をまとめると, 外教者の  $\acute{s}$  や外教の師に対する  $\acute{s}$  は宗教的立場の違い・善悪の結果の相違・肯定や否定といった区別に関わりなく使用されている. 外教者の  $\acute{s}$  が否定的に扱われる文脈では,  $\acute{s}$  の対象が不適切である点が批判的に扱われるか,  $\acute{s}$  が  $\acute{s}$  を具える者にとっての善悪いずれの結果にも繋がっており,  $\acute{s}$  そのものが否定的に扱われているわけではない. 以上の考察結果は, 先に指摘した N の視点とは相容れないものであると言える<sup>7)</sup>.

#### 4. その他 Norman 氏が指摘する「欲」としての $\acute{s}$

その他, N は Sn 1146c: *pamuñcassu saddham* (君 [Piṅgiya] は  $\acute{s}$  を発せよ)<sup>8)</sup> の  $\acute{s}$  を「信」(faith) を用いて訳す一方, 注記にて「欲」(desire) としての  $\acute{s}$  の可能性を指摘している (Norman 2001, 428f.). しかしこの場合,  $\acute{s}$  を「欲」と解す必要はない. 以下, その根拠を列挙する.

① Sn 1146 の後は釈尊の対話相手である Piṅgiya の偈が続いており, 文脈上, 彼の  $\acute{s}$  の表明部分 (内容) が含まれていると考えられる<sup>9)</sup>. そこでは  $\acute{s}$  と同じく「信」を意味する *pra- $\sqrt{}$ sad* が使用され (Sn 1147a), かつ「この点に関して私に疑惑はない」(Sn 1149d) と  $\acute{s}$  (信) の対義語「疑惑」(*kankhā*) が用いられており (Cf. S II, p. 84, V, p. 221), Sn 1146c の  $\acute{s}$  を否定的なものとして解すると不自然になる.

② Sn 1146a では, Piṅgiya の先達として Vakkali が挙げられている. N は, Th-a において Vakkali が釈尊から不浄の観察行 (*vipassanā*) を教授されても「彼の  $\acute{s}$  が強力な状態であるために観察の路 (顕現的な心作用の経路) に降りなかった」<sup>10)</sup> と伝えられている点から, 彼の  $\acute{s}$  そのものを捨離すべき否定的なものとして捉えている. しかし, Vism では, 五根中の信根が強力な場合, 他の四根の修養の弊害となるために捨て去られるべきであることが Vakkali の事例と共に言及されており, 中でも信根と慧根のバランスが強調されている (Vism p. 129). 本例の後に「観察行を行っている者には強力な慧が相応しい」とある点を踏まえると (Vism p. 130), Vakkali が観察行を修められなかった理由が, 彼の  $\acute{s}$  (信根) が慧根と比較して強

力すぎる余り、観察行の支障になってしまったことにあることが窺える。

以上を総合する限り、Sn 1146c の  $\acute{s}$  そのものは否定されるべきものや「欲」の意味で理解されているわけではないと言える。

## 5. おわりに

本論では N の Dhp 97 等の  $\acute{s}$  に対する見解を取り上げ、その視点の妥当性について考察を行った。否定的に扱われる  $\acute{s}$  について外教者の  $\acute{s}$  を考察すると、外教の師が  $\acute{s}$  の対象として適切でない点が批判されてはいても、 $\acute{s}$  そのものは否定的や悪い意味には用いられていない。氏が取り上げる Vakkali の  $\acute{s}$  にしても、 $\acute{s}$  が強すぎる点が問題視されているのであり、 $\acute{s}$  そのものが捨てられるべきようなものとは考えられていなかった。 $\acute{s}$  を文脈上良い/悪い意味で区別し、否定的に扱われている後者に「欲」の意味を設定しようとする視点は、パーリ聖典中の  $\acute{s}$  に関する限り適切ではないと言えよう。

聖典内の  $\acute{s}$  を「信」か「欲」という二者択一的に理解していく仕方では、 $\acute{s}$  から「欲」の意味を導き出すことは出来ない。今後は  $\acute{s}$  (信) と「欲」の関係を整理し、どの程度  $\acute{s}$  (信) が「欲」の要素と重なり合う形で使用されているのかを精査していくことが、後世「欲」とも理解される  $\acute{s}$  の性格をより一層明らかにすることに繋がると考える。

1) 本語の語形と基本的な意味については後藤 2007 及び阪本 2008 を参照のこと。

2) Cf. Köhler 1973, 3; 高橋 2014, 27f.

3) パラレルである『法句経』では、*assaddho* の部分が「棄欲」となっている (T4. 564b11)。ただし、他の漢訳文献では「不信」(T26. 916a15, T31. 773b12)・「無信」(T4. 750c4) と「信」が使用されており、常に「欲」あるいはそれに類する語が用いられるわけではない (諸例は藤田 1992, 106n. 29; Hara 1992, 184-185 を参照)。

4) こうした理解は直接目で見ることの出来ないものを  $\acute{s}$  する (見てしまうと  $\acute{s}$  が成り立たない) という  $\acute{s}$  の成立構造に関わっている (Cf. 堂山 2016)。

5) N は両義のうち  $\acute{s}$  を「欲」と解する「悪い意味」の理解が伝承過程の中で失われ、註釈理解が後付けられたと考えている (Norman 1991, 193)。しかし、註釈理解と同様の記述は既に仏教以前に認められる (古川 2015, 296)。

6) パラレルである『義足経』では「亦不欲断欲想」(亦欲せずして欲想を断ず) (T4. 187c21) と「欲」が用いられている。

7) 尚、林隆嗣氏は「パーリ註釈に至ると、知を離れたものや悪見者のそれは *saddhā* とは認められない」と指摘している (林 2014, 54. Cf. As pp. 249-250)。氏の指摘は本論の N の理解を支持するものではないが、聖典段階での  $\acute{s}$  の用法と後世の註釈文献の理解の間

に相違が認められる点には注意を要する。

- 8) 本例の理解については村上 1993, 139-141 を参照のこと。  
 9) Cf. Sn 973cd: *vācam pamañce kusalaṃ nātiveḷaṃ*. (Cf. Morris 1885, 46-48)  
 10) ... tassa *saddhā*balavabhāvato eva vipassanāvīthiṃ na otarati. (Th-a II, p. 148)

パーリ語文献の略号は *A Critical Pāli Dictionary* の Epilegomena に従う。パーリ語のテキストは Pali Text Society 版を底本とする。

〈参考文献〉

- Hara, M. 1992. "A Note on Dhammapada 97." *Indo-Iranian Journal* 35 (2/3): 179-191.  
 Köhler, H. W. 1973. *Śrad-dhā: in der vedischen und altbuddhistischen Literatur, herausgegeben von K. Janert*. Glasenapp-Stiftung Band 9. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.  
 Morris, R. R. 1885. "Notes and Queries." *Journal of the Pali Text Society* 2: 29-76.  
 Norman, K. R. 1991. "Dhammapada 97: A Misunderstood Paradox." In *Collected Papers II*. Oxford: Pali Text Society: 187-193.  
 Norman, K. R. trans. 1997. *The Word of the Doctrine (Dhammapada)*. Oxford: Pali Text Society.  
 Norman K. R. trans. 2001. *The Group of Discourses (Sutta-nipāta)*. 2nd ed. Oxford: Pali Text Society.  
 後藤敏文 2007 「*śraddhā*-, *crēdō* の語義と語形について」『論集』34: 578-561.  
 阪本(後藤)純子 2008 「「水たち」*āpas* と「信」*śraddhā* ——古代インド宗教における世界観——」『論集』35: 110-89.  
 堂山英次郎 2016 「インドラへの懷疑と信——RV II 12.5——」『印仏研』64(2): 782-775.  
 藤田宏達 1992 「原始仏教における信」仏教思想研究会編『仏教思想11 信』平楽寺書店, 91-142.  
 バウッダコーシャ・プロジェクトチーム(古川洋平, 一色大悟, 高橋晃一, 横山剛, 真鍋智裕, 林隆嗣) 2014 「*śraddhā/saddhā* の訳語をめぐって」『仏教文化研究論集』17: 3-64.  
 古川洋平 2015 「パーリ聖典中の信の構造に関する一考察——動詞形の格支配に注目して——」『印仏研』64(1): 297-294.  
 村上真完 1993 「「信を發こせ」再考——*Pamañcassu saddhaṃ*——」『佛教研究』22: 115-150.

〈キーワード〉 *śraddhā*, *saddhā*, 信, 欲, 初期仏教

(公益財団法人東洋哲学研究所委嘱研究員, 博士(文学))